



子育てから、 人権の芽を育てよう！

「子は親の鏡」

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる
とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる
(中略)

叱りつけてばかりいると、
子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう
励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる
広い心で接すれば、キレる子にはならない
誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ
愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ
認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる
見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる
分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ
親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る
子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ
やさしく、思いやりをもって育てれば、子どもは、やさしい子に育つ
守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ
和気あいあいとした家庭で育てば、
子どもは、この世の中はいいところだとおもえるようになる

ドロシー・ロー・ノルト著 (米国の教育学者)

【想像力を働かせる】

小学校の給食時間のことです。

左記は、アメリカの教育学者、ドロシー・ロー・ノルト氏の詩です。今から一五年ほど前に当時皇太子殿下が紹介され、感銘を受けた人も多いと思います。この詩を読むと、「子どもの一生を貫く、人権を大切にする心の芽」が、子育ての中にたくさん含まれていることに気づきます。今回は、「子育てにおける人権」について考えてみましょう。

一年生のAさんは、とうもうこしを持ちながらじつとしています。先生が「どうしたの？」と尋ねても答えません。先生は具合でも悪いのかと思い、「おなかが痛いのか？」と聞きました。Aさんは、首を横に振った後、とうもうこしを食べべっている周りの友達を見ています。その様子に気付いた先生は、「とうもうこしはね、こうやって食べるんだよ。」と食べ方をゆっくり見せました。すると、Aさんは笑顔になりました。大きな口を開けて食べ始めました。

【大人の声掛けによって】

このような微妙な様子や表情をとらえて、想像力を働かせたり、思いを巡らせたりして声を掛けることは、一人の子どもを大事に思っていることが姿に現れています。Aさんにとっても人権の芽が育つ瞬間と言えます。

小さな子どもは、「癩癩(かんしゃく)を起こす」ことがありますね。その時、親として家族として、地域の大人としてのどのような声を掛けますか？

- ① いい加減にしないさい。そんな聞き分けのない子知りません。
- ② ずいぶんイライラしてるのね。何か嫌なことがあったんだね。
- ③ いいわよ。ずっとそうやっていなさい。

よりよい声の掛け方は、②になります。小さな子は、自分の気持ちの的確に言葉で表現することが難しいので、自分の思い通りにならなかったり、伝えたくてもうまく言葉にできなったりすると「癩癩(かんしゃく)を起こす」という方法で伝えるのです。①や③のような声掛けだと、自分の気持ちを受け取ってもらえず、子

どもは余計にどうしたらよいかわからなくなり、さらに「癩癩(かんしゃく)を起こす」ことになります。

②のように、子どもの混乱を、まずきちんと受け止めます。少し落ち着いたら、「どうしたの？」と問いかけ、子どもの混乱を整理して「なるほど、〇〇が嫌だったんだね。△△のようにしたかったんだね。」と伝えます。親や家族、周りの大人が少し手助けすること、子どもは自分で癩癩に至った原因を考えます。さらに、どうするとその混乱した気持ち収まるのか、自分で答えを見つけ出すことにつながるのです。このように、大人の関わり方によって、子どもが自分の心と向き合う行為が、人権問題に対峙したとき、自分本位ではなく、冷静に考える力となるのです。

【人権を大切にしたい大人へ】

子どもは、見つめ・認め・愛してあげれば、自他の人権を大切にする子に育つと考えます。親として、大人として、今一度子どもへの接し方を見つめ、「人権の芽」を育てていきましょう。